

あらゆる困難を全てプラス思考で乗り切る
野末院長の考え方に人間としての生き方を学ぶ。



医療法人社団 山形愛心会
庄内余目病院
院長
野末 睦
Mutsumi Nozue

プロフィール

1957年(昭和32年)生まれ。長野県長野市出身

学歴
1982年3月 筑波大学医学専門学群 卒業
1988年3月 筑波大学大学院博士課程医学研究科生理学 卒業

職歴
1988年4月～1989年3月 筑波大学附属病院 医員
1989年3月～9月 筑波メディカルセンター病院
1989年10月～1990年3月 水戸中央病院 外科医長
1990年4月～12月 筑波大学附属病院 医員
1991年1月～1993年3月 筑波大学臨床医学系 講師
1993年5月～1995年5月 ハーバード大学
マサチューセッツ総合病院 研究員
1998年4月～2000年3月 筑波記念病院 外科部長
2000年4月～2002年3月 筑波大学臨床医学系 講師
2002年4月 庄内余目病院 院長就任



中学校時代のバレーボール大会

私の育った場所は長野県ですが、生まれた地は岐阜県です。というのも、私は「野末」という姓ですが、実は他に生みの母と兄弟がいるんです。育ての両親が野末という姓で、私は養子として野末家を継ぎました。生まれる前から長野に行くという事になっていて、その後、生後3ヶ月位で養母のもとにきました。後でわかったことですが、生みの母と養母は姉妹で、体が弱く子供のいなかっただけで、養母が生みの母に懇願し、養子をお願いしたのが実態のようです。ですから私は中学3年までずっと一人っ子だと思っていました。

出生の秘密

なく、養子だと知るまで不可解に思っていたことが逆にクリアになり、知っていた良かったと思えました。今思い出しても中学の時の同級生にはとても感謝することがあります。実は私自身も養子だと知る前からクラスメイトは全員私の出生の秘密を知っていて、もし私が養子だということを知った時、どうフォローするかという相談までしていたのです。私は本当にいい友人や先生に恵まれたと今でも感謝しています。

少年時代と
医師を目指すきっかけ

小学生と中学生の時は勉強とスポーツ、どちらも得意でした。常に学年で一番で生徒会長もやっていました。スポーツはバレーボールに熱中し、当時としては身長が高い方だったこともあり、アタックがよく決まっていた。試合では私のア

タックでボールが割れたりすることもあったんですよ。高校は進学校の長野高校だったのですが、進学校ではただ一人、国体の選手にも選ばれました。

私の夢は「誰もやれないような難しい仕事をやることでした。最初は裁判官とか政治家とかでしたが、それじゃハードルとしては低いな」と思い、だったら東京大学医学部の理3だろうと思いました。東大理3には毎年長野から一人入るから入らないかで、長野高校からも入学した生徒がいないう程でした。

医師を目指すきっかけの一つがその東大医学部への入学と、それからもう一つ決定的だったのは母の病気でした。育ての母は私が2、3歳の頃から中学に入る頃までずっと結核で入院していましたが、母はしきりに自分がお世話になっていた医師の話をしていました。そこから私も医師になって病気で困っている人を助けられたらいいなと思いい、医師になる決意をしました。

子供の時から運動神経抜群で秀才であった少年が
医学を目指すようになったきっかけに、
院長 野末 睦氏の優しさを見る。



母の死と大学受験

高校3年の時に東大理3に入るうと決めたのですが、当時の私の成績は、学年で100番位でした。当然先生や周りからは東大進学は無理だといわれました。それでも必死に勉強して、高3の冬の模擬試験では2番まで上がることができました。ところが高3の12月、元気に家を切り盛りしていた祖母が胃潰瘍で入院してしまいました。その祖母を看病していた父も入院、母が一人で無理をしながら家のことをしていたのですが、体の弱い母も入院してしまいました。残ったのは私だけで、その冬の正月は一人で迎えました。その後、祖母と父はまもなく退院したのですが、母の具合が徐々に悪くなり、2月10日に亡くなってしまいました。私が一番尊敬し慕っていた母を亡くした精神的ショックは大きく、勉強どころではなくなりました。



家族でのお花見

話はちょっと戻りますが、2月の始め、家族全員の入院を見かねた先生が「現在の状況では理3は難しいかもしれないので、もう一つだけ願書を出しておけ」と言われました。いるんな大学のパンフレットを見ていた中で、一つだけカラー写真を使用したパンフレットに目がとまり、「写真がキレイだからこの大学」と決め受験した筑波大学の医学部に幸い合格することができました。

医師になって良かったと感じる時

医師になって良かったと思うのは、やはり病気で困っている患者さんを治療し、その方が元気になってくれることです。筑波で施術した患者さんから、15年も20年も経つのに、いまだに年賀状を頂いたりするととても嬉しいです。医師冥利につきるといえるのは、こういうことだと思います。



アメリカ留学



ボストンにあるマサチューセッツ総合病院の研究室にて

筑波大学附属病院での医師の活動や大学院での研究を経て、35歳の時にハーバード大学マサチューセッツ総合病院に研究員として2年間留学しました。小学校3年生の長男をはじめ、子供が4人いたのですが全員連れて行きました。学校の心配などもありましたが、子供たちの順応力の高さに驚きました。アメリカでの生活はとても素晴らしく、医療だけでなく国民性の違いなどとてもよい勉強になりました。

アメリカから帰国後、筑波大学関係の病院で医師をしていた私は、漠然とこのまま医師を続けるだけではないのだからと、自分の仕事に疑問を持つようになりました。何となく管理職のようなことにも興味を持っていて私は、それなら病院長だと考えました。しかし筑波大学は医学部としての伝統がないので、病院長になるとしたら個人病院しかありませんでした。

当時44歳になっていた私は、個人病院の院長におさまって、その後20年くらいつがな院長を務めあげて、なんて考えたなら、私の人生はともつまらないように思えてきました。そんな中巡り会えたのが徳洲会、徳洲会の病院の中で偶然院長を探していたのが現在の庄内余目病院でした。

庄内余目病院への院長就任のきっかけ



庄内余目病院の素晴らしいところ

7年前(2002年4月)に私が就任した時、庄内余目病院は建物はとても立派でしたが、常勤の医師は数名しかいないという当時の病院では考えられないくらい悲惨な状況でした。就任して何年かは医師探しに奔走する日々でした。今では日本一と誇れる分野があります。それは創傷ケアセンターです。創傷とは傷のことですが、数ヶ月以上経っても治らない足の傷や、今までの医療では切断してしまうような傷でもしっかりと治療することで切断を防ぐことができます。

この創傷ケアセンターでは、他の病院で切断と言われた足の40%を救うこと、また、数ヶ月以上治らなかった慢性創傷を3ヶ月以内に80%治すことを目標に掲げています。それに対しての実績は、例えば切断に関していえば60%を達成している



ます。県外からも多くの患者さんが相談に見えられ、日本一というのはその患者さんの数です。

他にも自慢できるところはたくさんあります。透折やリハビリは規模や設備的にも庄内で誇れる施設とっています。また外科と循環器も素晴らしく、鏡視下手術は県内で一番早く取り入れました。現在は常勤医師も12名おり、今後もいくつかの分野で山形で一番、東北で一番、日本で一番の分野が必ずできると思っています。

野末院長の夢とは

私は現在51歳ですが少し前に、自分の人生目標を102歳でフルマラソンを走ることに設定しました。そうしたら急に人生が長くなった気分です！どうしてそれに決めたのかというと、イギリスの人がボランティア活動のスペンサーを得る手段として、101歳でフルマラソンを走ったのを見てかっこいいと思ったんです。私は負けず嫌いなので、それなら私は102歳でフルマラソンを走り、社会に貢献できるボランティアをやろうと決めました。



庄内で好きな所 好きな食べ物

好きなところは羽黒山です。初めて訪れた時から惹かれましたね。好きな食べ物はやはり庄内といったら寿司と酒！いきつけは酒田のこい勢さんと錦政さんですが、何度行っても飽きません。



庄内余目病院
「生命を安心して預けられる病院」
「健康と生活を守る病院」
「地域とふれあい地域に感謝する病院」
を理念に、地域の人たちに包括的な医療提供を行っている。

下段写真右 | 透析センター
ベッド数は全部で62床あり、長時間の透析をリラックスして行えるように広々とした室内になっている。

下段写真左 | リハビリセンター
センターには理学療法士、作業療法士、聴言語聴覚士などのスタッフがおり、筋トレマシンなどの設備も整っている。

